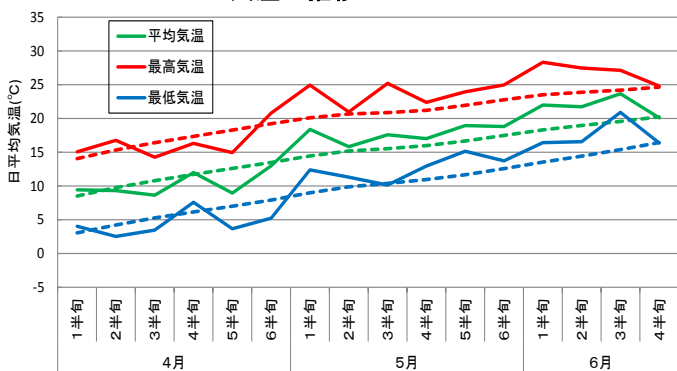


# 「みずかがみ」穂肥・JAこうか特別栽培米生産部会 現地研修会資料

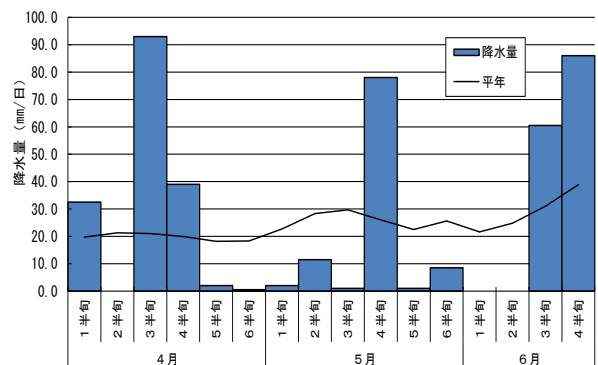
## 1. 気象の状況

- 1) 気温：4月第2～第3半旬および第5～第6半旬を除いて、平年に比べ気温は高く経過しました。直近では平年並みの気温となっています。
- 2) 降水量・日照時間：4月第1、3、4半旬、5月第4半旬、6月第3～第4半旬にはまとまった降雨がありました。それ以外は降雨が少ない期間が続きました。6月10日に梅雨入りした後は、曇雨天の日が続いています。  
 日照時間は、4月第3半旬、5月第4半旬および6月第3半旬を除き、平年並以上となりました。

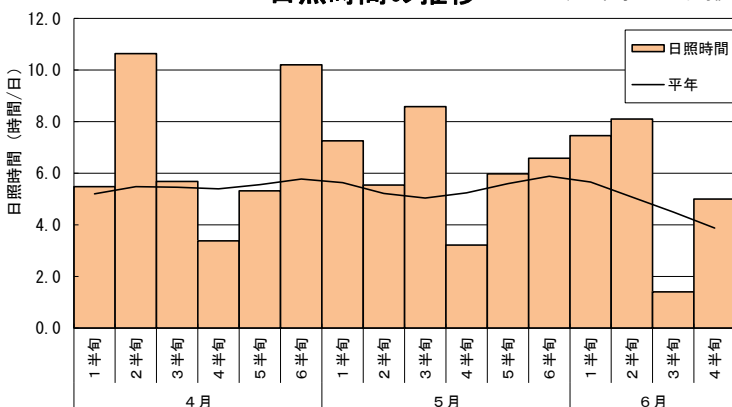
気温の推移 ※ただし、6半旬ごとの平均値



降水量の推移 ※ただし、6半旬ごとの値



日照時間の推移 ※ただし、6半旬ごとの平均値



注) 2020年アメダスのデータ  
 また、半旬とは5日間を示し、毎月1～5日を第1半旬、6～10日を第2半旬・・・といいます。

## 2. これまでの生育経過

昨年度に比べ育苗期の4月、特に下旬が低温で、苗の生育はやや遅れ気味でした。

4月下旬の移植では、強冷風による植痛みが一部みられましたが、5月に入ってから移植では比較的活着は良好で、以後は植痛みはほとんどなく、生育は順調でした。

5月中旬以降の高温により早くから還元障害が発生しているほ場や、藻類の発生が多いほ場が散見されますが、全般に高温多照に経過していることから水稻の生育は良好です。

一方、中山間地域や山際のほ場では、日照量の不足や水温の影響等で分けつが十分とれていないほ場があるなど、生育のバラツキが見られるほ場が散見されます。

また、雑草の発生状況は、藻類の多発生と残草としてヒエや広葉雑草（特にホタルイ）の発生が見られています。

### 3. 生育の状況（県域「みずかがみ」の生育状況）

県農技センターの調査ほでは、当初低温や強風の影響等もあり、初期生育が緩慢で分けつ数はやや少ない傾向でしたが、その後の高温で生育が回復し、6月11日現在、茎数がやや少ない以外は、草丈、葉色や葉齢は、ほぼ平年並みの生育となっています。

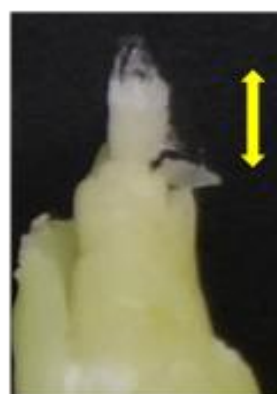
### 4. 今後の管理について

#### チャレンジ特A ポイント①

#### 1) 「みずかがみ」の穂肥は適期に施用しましょう

5月初め田植えの「みずかがみ」の穂肥時期は、標準的な生育のほ場で、6月28日頃です。穂肥が遅れたり過剰に施用すると食味が落ちてしまいます。穂肥は遅れず適期に施用しましょう。遅れると食味が落ちるだけでなく、減収します。

<幼穂形成期>



幼穂長 1mm

#### 「みずかがみ」 穂肥の時期と基準量

施肥タイプ	施用時期・月日(目安)	施肥量(kg/10アール)
基本・省力型	出穂前25日・幼穂長1mm (6月28日頃)	このう有機かふか50 20kg
転作跡(大豆跡)		このう有機かふか50 10kg
一発肥料型 (いち太郎70あお)	施用しない	

※大豆跡ほ場など、葉色が濃い場合(4.5以上)には穂肥は半量とします。

※このう有機かふか50 成分(N-P-K=14-0-10、内化学窒素成分11.9%)

#### 2) 他の早生品種について

生育の遅速は、現在の葉齢からみて平年並の見込みです。ただし、田植時期や地域によりバラついていきます。

## 「コシヒカリ」 穂肥の時期と基準量

品種	穂肥の時期と10aあたり施用量	
	出穂18日前 穂肥1回目(幼穂7~10mm)	出穂11日前 穂肥2回目(1週間後)
コシヒカリ	ここのう有機かふか50 15kg (白未熟対策 " 10kg)	ここのう有機かふか50 10kg (白未熟対策 " 15kg)

## 「キヌヒカリ」 穂肥の時期と基準量

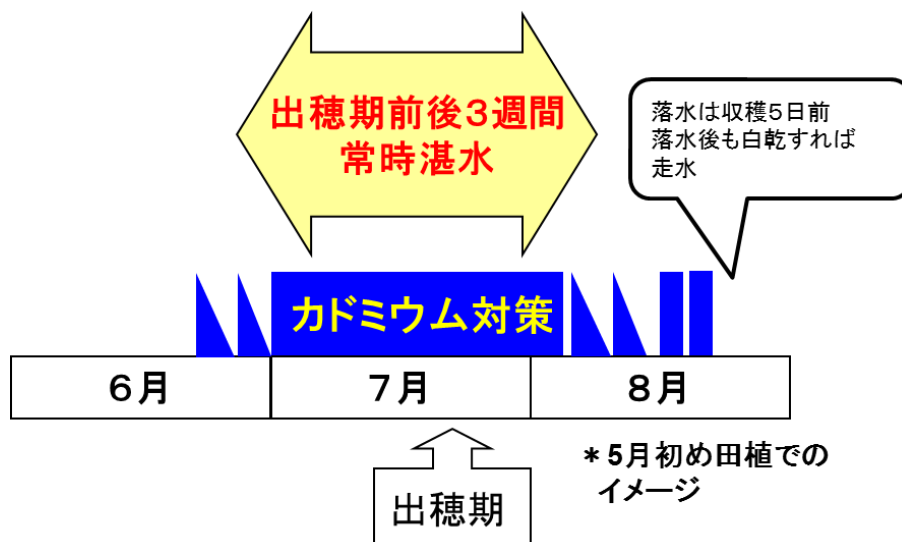
地帯	穂肥の時期と10a 当たり施用量	
	出穂25日前 穂肥1回目(幼穂1mm)	出穂18日前 穂肥2回目(1週間後)
一般(壤土など)	ここのう有機かふか50 25kg	—
砂壤土地帯	ここのう有機かふか50 10kg	ここのう有機かふか50 20kg

※穂肥は水稻の生育診断(幼穂長、葉色)に基づいて施肥量、施肥時期の調整を行います

## チャレンジ特A ポイント②

### 3) 水管理

5月上旬に移植した「みずかがみ」は、7月23日前後に出穂期を迎えます。出穂期前後各3週間(7月初旬~8月中旬)はカドミウム吸収抑制、品質向上のため常時湛水管理にします。湛水管理終了後は、間断灌水を実施し、根の活力維持に努めます。



### 4) 病虫害

#### ★いもち病

近年、梅雨明けの時期が不安定になっております。昨年のように梅雨明けが遅く、遅くまで低温が続く年は、いもち病の発生がしやすい条件が続きますので、特に注意が必要です。

いもち病の感染に好適な気象条件等は、葉面の湿潤時間中の平均気温が15~25℃であり、湿潤時間が十分で、当日を含めてその日以前5日間の日平均気温の平均値が20~25℃の範囲です。感染好適日から数日の後、病徴が出る危険性があるのでほ場観察を行います。



葉いもち

### ★斑点米カメムシ類

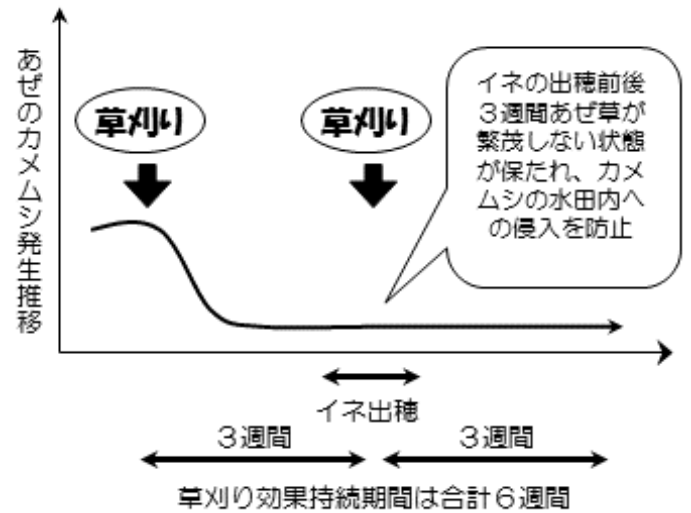
◎「みずかがみ」は、「コシヒカリ」や「キヌヒカリ」より出穂が早いため、畦畔等の雑草地からのカメムシ類の侵入を受けやすく、斑点米発生の危険性も高くなります。

#### ◎出穂3週間前と出穂期の2回草刈り

出穂3週間前と出穂期の2回草刈りで畦畔でのカメムシ類の発生が少なくなり、ほ場への侵入が少なくなります。薬剤防除だけではカメムシ類の被害を十分に防ぐことは困難です。適期の畦畔草刈りと薬剤防除の組み合わせで、カメムシ類の被害を防止しましょう。

◎出穂時期が他の品種に比べ早い = 防除適期も早い、ということです。

7月初旬に1回目の畦畔草刈り、その3週間後（7月中旬以降の出穂期）に2回目の畦畔草刈りをしたうえで、出穂7～10日後（7月末～8月初旬）に薬剤防除を実施しましょう。



カメムシ（ホソハリカメムシ）と斑点米